



Title	シュテファン・ゲオルゲ研究 : 伝記(6)
Author(s)	八木, 浩
Citation	大阪外国語大学学報. 1965, 15, p. 231-253
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80248
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

シュテファン・ゲオルゲ研究

伝記 (6)

八 木 浩

Stefan George

—Sein Leben (6)—

Hiroshi Yagi

Umriss

Hier wird der späte George in der Weimarer Republik behandelt. Besonders von seiner Freundschaft mit Max Kommerell, Hans Anton, Friedrich Wolters, Friedrich Gundolf, Karl Wolfskehl, Ludwig Derleth, Victor Frank, Gebrüdern Stauffenberg ist hier die Rede.

Aber in dem historisch wichtigen Zeitpunkt kann man nicht umhin, die Stellungen des Dichters zu dieser Zeit genauer zu erforschen. Stefan George, der keinen bourgeois Geist gehabt hatte, wurde durch den Hitler-Staat gar nicht benutzt. Gerade hier kann man durch diesen Dichter den Geist der autonomen Kunst verteidigen, obgleich man leider nicht immer diese Art des Geistes verteidigen kann. Trotzdem kann man die Verzweiflung des Dichters oft bemerken und muss fragen, woher diese stamme.

Der Dichter, der sein Leben lang das Schöne erforschte und das Bild und die Idee erneuern und verleblichen wollte, hatte immer geglaubt, diese Methode sei das Beste.

Aber in der Weimarer Republik wird diese Methode immer verdächtiger. Ob das Schöne und das Ideale auf dieser Welt zu verwirklichen seien—zu dieser Frage hatte er schon früher eine Entscheidung getroffen. Für ihn war das Reich des Gottes und des Gedichtes auf dieser Erde realisierbar. In diesem Punkt war er der

objektivste Dichter aller Dichter, er war kein Dichter der Kunst für die Kunst. Aber er hatte sein schönes Bild schützen wollen, ob es Reich, Kreis, Bund sei. Schon aber war diese Methode gefährlich. Imperialisten benutzen sie für ihren Zweck. W.Benjamin, B.Brecht oder G.Benn haben schon angefangen, Bilder zu zerstören. Der destruktiv zerstörende oder verfremdende Charakter ist notwendig geworden. Vielleicht hat der Dichter bemerkt, dass die Objektivität seiner realisierbaren Bilder schon schicksalhaft verspätet in der Zeit und trotzdem ewig richtig ist. Also ist sein Reich die Utopie geworden. Edith Landmann meinte: Borchardts Satz: "Die Welt regeneriert sich nicht an Gedichten", wäre richtig, wenn man statt des Wortes 'nicht', 'nur' setzte. Worauf antwortete George: "Oder auch wenn man sagte: nicht an allen Gedichten regeneriert sich die Welt." Damit wollte George sagen, seiner Utopie liege trotzdem der Kern der Realität zugrunde.

Hier, wo sowohl die Faschisten als auch die Sozialisten den Angriffspunkt gegen den Dichter zu haben meinten, muss man lange stehen bleiben und jedes Problem immer wieder erneut ins Auge fassen. Dazu helfen uns viele Tatsachen, die wir schon durch die Literatur und die Gespräche, die neulich erschienen sind, ziemlich viel wissen können. Seine Lyrik durchschlägt „in der Vollendung des Besonderen, in der Sensibilität gegen das Banale ebenso wie schliesslich auch gegen das Erlesene, die Mauern der Individualität.“ (T. W.Adorno: Noten zur Literatur I.) Diese autonome Kunst und ihre sozialen und geschichtlichen Verhältnisse richtig zu beurteilen und deren Wahrheit bei George festzustellen, muss die Aufgabe der Forschung sein.

Der Platonischen Utopie liegt die Realität von Sparta zugrunde.

Im Ausspinnen einer Realität liegt ein Wert...

Nicht an allen Gedichten regeneriert sich die Welt.

— Aus „Gespräch mit Stefan George“ von Edith Landmann —

1

もしゲオルゲが「約束の星」と「戦争」とで作品を閉じていたら、彼のドイツ文学における位置はもっと安定したものに見えたであろう、とジャイメはいう。しかしそののちゲオルゲは、「芸術草紙」二巻を、1921年には「三つの歌」を、1928年には「約束の星」以後の全詩を収めた「新しい国」を出した。国—Reich—とは、一体何を意味するのか？ これは国策の詩（Staatsdichtung）なのか？ もちろんそれは御用詩ではなく、外面的にはまだまだ遠いユートピア的な内面の国の詩であった。クライス、ブント、ライヒへとゲオルゲの考えはひろがっていき、若干の人にあてられた詩から、成熟した人なら自由にはいれる神聖な国の詩へと発展した。この国を反動的な人が、欲望に燃えて占領しようとした。しかし詩人は、一度も国家の権力に守られたり、それと手をつないだりしたことがなかったし、反動化する時の動きにこびたこともなかった。

1908年から1921年までにできた詩を集めた厳重な排列をもつこの詩集は、ドイツ文学における古代精神との合一を説く「イタリーにおけるゲーテの最後の夕」でひらかれ、中央に反戦の長詩「戦争」をおき、青春に捧げた美しいリートで閉じる。技術的時代における自然を扱い、人生は魔術によってこそめざめるといい、またキリストの血を軽卒な盲従から峻別し、さらに「神殿炎上」で伝統破壊者の出現を预言するような詩を書いた。肯否いずれかわからないこの詩でゲオルゲは古いもののみにしがみついて流れに現代をまかせる疎外状況を警告したのである。古典劇を自然主義風に殺して切断する、情熱の仮面をつけたドラマに絶えず疑いをいだいた詩人は、ここでドラマの基礎をさぐっている。しかしこれらの詩の中で、最も多く誤用された詩は「混乱の時代における詩人」である。この詩は敵からも味方からも考えもなしに引用され、時には「国民の軍旗」とは何か、ナチではないか、という風にいわれたりした。われわれはざっと読みすごさずここに永く止まって、ファシズムが利用の足がかりをえたところをかみしめねばならない。大体この詩は20年以上ナチより古い。そして未来のさだかでない人間精神を手探ったものである。それは歴史上の時期とは何の関係もなかった。1933年や1945年に終らぬ、無限の時間に関する理念である。未来を指示する者とか、国を建てる者とかを考えたことが、すぐ軍国主義者に利用され

るとは不可解なことに思われる。自己を制御する主とか、訓練とか、人類解放と民主主義にかかわる思想とか、旗とか、嵐とか、苦しみの象徴とかも、またナチの利用するところとなりかねなかったのである。そしてこの運命は、ワーグナーにおいても、ニーチェにおいても、さらにヘルダーやゲーテやヘルダーリンにおいても、同じくあてはまるものであった。

1928年にボルヒェルトはこう書いている：「ゲオルゲやクローチェのような偉大な救済の仕事がドイツとイタリアで浸透することに失敗し、真実の性格を欺くタイプの人の変種でのみこまれ、新しいゲオルゲやクローチェばりの文化の担い手たちが人々を虚栄化し、煽動して墮落にくだみし、なおかつ文学的表現手段、すなわち最後の手がたい世代の作家の表現手段にまで手をのばし、遂にからいばりのむなしさのためその表現自体の必要性も消滅し、あらゆる弱点のまつわりついた欠陥が黙々と世界を支配するに至るとき、なおかつ世界史の時期の識者は、偉大な文学が世紀の意義深さを自己の中に宿すのをよくわきまえるものである。」ボルヒェルトの予言のように、ゲオルゲ文学は変化する偽瞞のやからにのみこまれていった。その決定的な終局において、エルンスト・モルヴィツはゲオルゲの詩の註解書を出版して、ナチに対して誤解を正そうとした。1939年に出て禁書になったこの書はのべている：「精神の災をかきおこし、内面から肉体を形成し、ヨーロッパの心臓から世界に自由をもたらす種族を生むことが、詩人の賛美するところであった。そしてこの後高は、自分がよりよい存在だなど威張ったりしないし、またやかましい兄弟呼ばわりなどを憎む。そしてそのまん中から救い主が現れて、迷える者を不変の正義に赴くように強いるのである。」

ゲオルゲはもうすでにこのような時代の動きとその結果を意識していた。晩年のゲオルゲにおいてわれわれが驚くのは、彼が歴史の根本を省察し、かつ自分の存在を尊び、自分の力を正しくつかみ、実に確かな足どりで危機を避けたあざやかさである。ゲオルゲは最後に、美しくて深いリートを書いた。夢のような、しかも力の充実した体験を歌った。だが確信の歌ではなく、問の歌である。「暗い大地が語るのを聞け」とか「言葉」とか「盃」とかいう歌は、われわれにゲオルゲの最後が、問であったことをしのばせる。緊張した一つの問。予言者でもない、叫ぶ人でもない、指導者でもない…自ら一つのつまづきを覚えて、尋ねることにより、ゲオルゲは再び真の詩人になった。例えば盃という詩は、不思議な謎に包まれている：

みよ この金の盃

きらめく酒に満ち

たれでも一すすりする

みよ あの木の盃の
石の三つのさいころ
たれでも一投げする

この盃は腹立てず
人のさだめをつげる
われらはそれをのみほすのみ

あの盃はきめる
予測回避しえいものを
私の運 君の運を

「一体詩人は、自分の盃で、金盃を幸運として一すすりし、宿命として木盃を一投げし、どう
いう結果が出たというのであろうか」とショーナウアーは問う。「ともかくあきらめと運命愛の
歌ではないか」と。同じくわれわれは問うのである、一体ゲオルゲの「言葉」という不思議な詩
は、ともかくまたしてもあきらめと運命愛の歌ではないかと：

遠くからの不思議か 夢かを
わが国ざかいにもたらしした

そして待った 白髪的女神ノルンが
その泉の中に名を見出すまで――

こうしてそれを力強く手にとりえて
それは今や辺境に花咲き きらめく

あるとき幸いの旅をおえて
うつくしい宝を持って帰った

彼女が探しあぐんで告げるには――
「深い底には眠るものなし」

こうしてそれはわが手からこぼれ
わが国がその宝を得ることはなかった

そこで悲しくも学んだ諦め――
「言葉の欠けるところ何物も存在せず」

ゲオルゲの詩業は終わった、と私達はこの詩から判断すべきであろうか。詩人は今や運命の盃が
どういうさいの目を出すか見守っている。そして、実に宿命的な、不吉な答を見たのだ、と考え
るべきであろうか。たしかに10年以上も詩を出版せず、沈黙のうちに消えていった詩人のことを
思うと、「歌わぬ詩人」といえそうではないか。しかし、ヴァレンチンを始め、さまざまな人が
戦後畏敬の念をこめて出したゲオルゲの談話録は、語る詩人を生き生きと伝えてくれる。ゴート
ハイムにゲオルゲは、プラトンのファイドロスの話をした。Thot の神が老ファラオを訪れ人
間に文字をもたらそうとした。ファラオは感謝してそれをことわった。というのは、文字で人間
が楽をして、邪道に導かれ、記憶にたよることが少くなり、役立たぬものを書きつけるように
なり、またこれまで価値なしと思われたことを覚えこむであろうからである。ゲオルゲはさらに
いった、生きた言葉から書かれた言葉への下降と同じような、書かれた言葉から印刷された言葉
への下降がみられる。人間はすりへらす日常の仕事のために事物の根源と結論を忘れ、根源的な
ものが古くさく、わけのわからぬ荘重さにみえる。ところが永遠のものは亡びることがないのだ
と。こうして晩年の詩人は、印刷した言葉、書かれた言葉をすて、語る言葉のみで生きようとつ
とめたあとがみられる。従ってゲオルゲの語る言葉については、印刷された作品以上に慎重な評
価がいるであろう。

ゲオルゲは崩れゆく自他の世界を単に透視し、それを否定するというようなところに止まりは
しなかった。人々が盲目で、指導者が薄弱で、国全体が予言に耳を供さず、危機に近づくにつ
あるとき、その状況を描写したり、力なくルーズに歌ったりしなかった。彼は身をさしのべて、一
人一人の若い人とみがきあったのである。そしてそのようなゲオルゲの対話の断片は、危機の前
の完成像、古いヨーロッパの最後の古典像を、十分に伺わせるにたりるものである。病床にあ
り、なおかつ彼はいった：「最近の青年の軽卒な気らくさは困ったことだ。ヴォルフガングは重
厚さが退くと精神の泉が渦巻くのを知っていた。現今の人は渦巻いていても、たいていはおしゃ
べりにすぎない。」このような趣旨につらぬかれたゲオルゲの対話について、また別個の考察が
必要である（Der Späte George im Gespräch mit Vallentin で私はそれを要約した）。こ

ここではさらに伝記的事項を要約することにする。

2

マックス・コメレル (Max Kommerell 1902年～1944年) とシュテファン・ゲオルゲの交渉は、上述のような性格の晩年のゲオルゲの生涯で特筆すべきことだと思われる。しかしそう詳しい資料があるわけではないので、明確な判断をこの二人の関係に下すわけにはいかない。ゲオルゲがコメレルを識り、戦争の傷もなおるほどの喜びを覚えたのは1920年のことである。コメレルこそ、ゲンドルフ以後ゲオルゲが見出した最も才能のある、教養を積んだ、巾広い受容力の人だと思われた。コメレルの思索と言葉、分別と想像力はゲオルゲに大きな魅力を及ぼし、ゲオルゲは若いコメレルの成長に期待を寄せた。コメレルとその親友ハンス・アントン (Hans Anton 1900～1931) は雙生児のようにゲオルゲに従い、バーゼルに、マールブルクに、キールに、ベルリンに同行し、常に内面の国のことを語った。しかしゲオルゲのこの希望はそう長続きしなかった。コメレルは師のもとから次第にのがれようと思い始めた。1925年のゲオルゲあての手紙では、自分がかってあったものと同じものにならないこと、弱くても幼なかった昔から脱し、それに打ち克つことを強調している。1930年の手紙では、「あなたは私に、内実のものを教えるつもりですが、私はもはや同じものではないのです。この二、三年にへた変化のために、あらゆる強固な結合体から引き離されています。どこへいくのか知らぬし、どこへいくのか、いえません。私は全く柔軟な、燃えやすいもので、どんな形式に固着されたらよいのかわかりません」と書いている。ハンス・アントンにあてて、やはり同じことが書かれている：「マイスターが前提にしている絶対的な考えは疑わしい。」「今こそ私は、生きることを始めた子供のようだ。」「マイスターのいるベルリンにいく内的な理由は全くない。」1930年のコメレルのマールブルク大学教授就任講演は、ホーフマンスタール礼賛であり、その結論は次のようであった：「われわれはホーフマンスタールの中に、ドイツ民族を認め、歓迎しようではないか。その深い精神は音楽であり、その軽やかな精神は未だギリシャ的なものをもっている。」これはゲオルゲに反して、ホーフマンスタールを賞揚する言葉ととれるほど明白な対比に富む表現ではあるが、次の詩はもっとコメレルの問題点をしばって明白にしている：

砂時計 十二宮 権標 グラスが

薪の焰を巖しく おさえつけ

私はかたわになり病気にされた。

だが今 次第に回復して、

純粹な存在にならい振舞う。

山から風が吹いて 荒らく

私の爐のひげを動かす：

今こそ子供のままで進め、

洪笑だけ 税金に払え」と。

私は身ぶるいして笑わせる、

魔術にかかったしかめつらを。

狂気の白いこだまがする。

取り去れ 圧迫するマスク！

ここですべては純粹で涼しい。

風よ お前の背にのせて

ケンタウロスの境地にはこべ。

こうしてコメレルはゲオルゲを克服したと思った。これまでゲオルゲに詩を捧げ、芸術草紙に詩を寄せてきたコメレルが、この詩の一年前に、16篇の詩をゲオルゲに捧げ、仕事場（Die Werkstatt）と題し、「長いしかも動的な印象のしめくくりとして、」マイスターに捧げる言葉をしるしたのであった。こうしてコメレルはゲオルゲのみではなく、アントンやエーヴァルト・フォルハルトからも別れてしまう。友人の仲介はすべてむなしい拒絶に出あった。アントンにあてた和解拒否の手紙は、ヴォルタースのゲオルゲ論をめぐるものがかなめになっている。自由精神を戦慄させるセクト主義、教会調、大小混同……それを容認しているゲオルゲ派への攻撃などからすると、コメレルのゲオルゲからの離反には、クライスへの嫌悪という大きな動機があったのである。真の姿とうわべの形式、詩精神と儀式調、神聖さと凡俗さ、純粹人間性と神を知らぬ魔術、それらの大きなさけ目をコメレルはゲオルゲ派に指摘している。オーストリー生まれの繊細なアントンは、1931年2月末親友コメレルの生まれた日に、コメレル訪問後、自殺の道を選んで、師と親友の矛盾から生じた悩みに終止符を打った。アントンもまたよき詩人であった。ゲオルゲは遺された詩を選び、それがゲオルゲの死後1935年に出版されている。またコメレルは1931

年10月にアントンのミケランジェロ訳詩集を出している。

アントン、コメレル、ゲオルゲのこの劇的な関係を、どのように判断すべきか、だれに罪があるとなすべきか、むづかしい。アントンは、青年的な純粋さ一つで、中年へと伸びゆく素質に欠けていたといえるであろう。コメレルには愛が欠けていて、冷い批判しかなかったといえるであろう。そしてゲオルゲは、青年の可能性を判断するとき、余りにも厳しい線を引きすぎていたといえよう。三人とももう一巾ひろい、緊張を解いた立場に立てなかったであろうか。コメレルにしても、ゲオルゲから悲劇を強要するだけの、大きな詩論をもっていない。「純粋詩には、より高い個性がいる。高揚とエートス、パートスと儀式、それに魔術がいる」と、さきほどのアントンあての手紙に書き、また、そののちも立場がゆれて、自分の詩をマイスターに出版してもらえようと、アントンを介して依頼しているのである。それにコメレルは、ヴォルターズなどのこととゲオルゲとを混同している。彼の批判には、多くの暗示があるが、それにしても正確な証拠と救いの方向が欠けている。まだ、ホーフマンスタールという漠とした暗示をめぐって動いているのである。ナチズムが出る数年前だから、私達はコメレルから、尚視野の広い包摂的な見方を欲するのである。ゲオルゲは、コメレルについて、のちに、「彼はたくさんできるものだから、何でもなしうる、と思っている」とのべた。コメレルはグンドルフより多くのことができたかもしれなかった。しかし、彼は10年前にともに生き、楽しみ、求めたことを正しくないと思ひ、尊崇を否認し、ある日マイスターの書簡を火に投げこんだのであった。しかし彼の崇拜するホーフマンスタールは歌っているではないか：

私は一語だけをよく理解する

そしていつもその語を耳にする：

「ひとたび贈られた幸福

それを二度ととりけすな。」

コメレルの仕方は、決して精神にかなったやり方とは思えない。ゲオルゲがコメレルに罪ありと思ったとしても怪しむにたりない。これまで彼はコメレルをマクシムとかブックとが呼んでいたのに、そののち Kröte (がま) と呼んだりした。 烈しい離反のため、コメレルは師の復讐を恐れていた。ゲオルゲが「10年の間私はいかに復讐するかを思いめぐらしうる」といった忠告が、彼の耳を離れなかった。80通のゲオルゲの書簡を焼いたのは、おそろしい復讐につきまとわれたマックス・コメレルの行動と解釈されるのである。こうしてクライスの危機をこんな烈しい

形で警告したコメレルが、また自らゲオルゲクライスの危機を表現することになった。

カロッサがいうようなクライスの弟子の立場を——すなわち「読みなれたところよい、あるいはがっかりした詩句の形式に対する楽しみを奪い去ったことを、いつまでも恨みに思い、またゲオルゲが彼らの世俗的喋舌をいつまでも墓の中から軽蔑していると感じるために、とつくに死んだ詩人を恨む人人」の立場を、コメレルは代表している。「死んだ師の厳しい目が自由に書き流すことを許さないで、ひそかにのろう弟子達（カロッサ）は、すべてみなコメレルの類である。コメレルはマイスターに対して、グンドルフと全く違った態度をとりながら、グンドルフと同じケースを辿り、ゲルマニストとして活躍したので、若干の翻訳戯曲のほかは、一巻の、そう重要でない詩集（Rückkehr zum Anfang 1956）が残されているくらいのものである。彼の詩集のモットーは、一瞬も一年も、また生も死も一如で、神々には同じであり、

神々はただ真剣に聞く

変化（Verwandlung）ということ

と、ホーフマンスタールの理念に従い、自分の行動を正当化しているが、またつぎのような詩も収録され、（またその「最初への帰還」という題からみても）、マイスターとの融和をはかろうとしたのではないかとも思われてくる：

こんなに囲みつつまた囲まれて？

君が去れば 私はおもう

君が私の中で憩い 向うで待っていると。

眼を閉じれば 私はおもう

私はすなわち君なのだ。

3

さてここで、マックス・コメレルの説をもっと現代的にクライスにあてなおして見る必要がある。ゲオルゲが1933年に死に、またその詩人としての活動が10年以上前に終わっていることを考慮しても、なお、ナチズム発生のときの地盤に立っている以上、やはり詩人とこの政治的事件とを切り離して考えられないのである。このドイツの破滅からみれば、ゲオルゲも沈黙そのもので危機を表現している。彼の不毛の沈黙は、この時代に処するのがどんなに困難かを自覚せよと呼びかけているようである。この見地からすれば、クライスの人々はみな危機を、すなわちドイツ文化を救う力の不足をあらわすもので、コメレルもまた例外ではなかった。ベルトラムは神話的、

グンドルフは知識的で、鋭利な批判精神に欠け、ヴォルタースは恣意的で愛情の公平さに欠け、むしろ危険な右翼の成長を助成しやすく、コメレルは疑惑的、否定的で、静止後退し、あいまいであり、ヴォルフスケールは信仰と陶醉に走って逃避につらなるし、デルレーは神秘的、わかりにくい、情熱口調に終っているし、またシュタウヘンベルクは行動的反抗的であるが、それを成功させる巧みさに欠けている。クライスの人達には追放されたり、亡命したり、収容所にいたり、戦死したりした人がどんなに多いことであろう。ゲオルゲはこれらの人のどれともせず、神話的な北方的なものには迷わされず、現実的でまた南方のものをめざませし、また学問と知識によって衰弱せず、創造のみを根源とみなし、新しい流行的思想タイプにおぼれず、厳格な批判の精神で生きるように呼びかけた。疑いにさいなまれず、明確な核心を失わず、行動のみに走らず、しかも疎外されず、商品化せず、宗教的にあるいは内面的に逃避せず、ただみんなの中心となって、さたるべき時代を正視することを要求しているようである。それゆえに、二、三の重要なクライスの中心人物をみると、ゲオルゲの位置がよりよくわかってくるといえる。

ザーリンによると、ヴォルタース (Friedrich Wolters 1876~1930) は、第一次大戦後、常識の意味における政治的意志に駆りたてられた。彼は無責任な愛国主義者やドイツ主義者ではなかったし、ナショナリスト的な党派にくみしたこともなかったが、ただ、世界的指導者や偉大な教育者にあるべき点に欠けていた。ゲオルゲのもっていた嘲笑や真剣さや畏敬や高貴さが、彼の中に多様な結集を示すことはなかった。自らプロシヤ主義をこきおろしながらプロシヤ的なものを宿し、その教育観は劃一的で忍従的であった。ザーリンは、これは人を決して士官以上に高めないものだといっている。彼はゲオルゲの完結した人間性からはほど遠かった。彼は若い友人を獲んと努めたが、グンドルフなどは、意識的に彼を斥けていた。教育者に必要な恵み深さが彼には欠けていたのである。ヴォルタースは「ライン、われらの運命」(1923)、「祖国的思考への教育者ゲーテ」(1925)の二著を続けて書き、このためにクライスとの関係が危機に及んだ。ゲオルゲは、くり返して彼に反省を求めて忠告したので、除々に意見の対立がときほぐれ、決裂をかわらうじて避けることができた。彼はゲオルゲの友情により、「破壊的な、偏狭な愛国主義と、ゲオルゲの意味における祖国的なものを明確に区別すべきであること」を認めたのであった。このゲーテ論でヴォルタースはゲーテの自由戦争に対する態度を責め、そのころの作品がどんなにすぐれていても、それをとり去ってのち、若い人にゲーテを読むことが許されるとのべ、これに対してクライスの人々から、愛と畏敬と教育の魂に欠けた偽りの立場にすぎぬという反論をうけた。「祖国のための犠牲死の意義について」という講演は、このような危機の克服後の作品で、彼の諸作品中、最も美しいものだといわれている。しかし彼の仕事の絶頂をなしたのは、

「シュテファン・ゲオルゲと芸術草紙」という大著であった。

人間精神の最も深い、不滅の表現であり、あらゆる高貴な生のしるしである歴史を、ときに歴史学が窒息させる。歴史病のために生の造形力がむしばまれると、記憶の力は弱まり濁され不確かになる。だから忘れる力が歴史の高みを作りあげるともいえるほどである。世紀の始めに人々は、ニーチェを読んで、歴史の人生に対する利害についてよく考えたものである。記憶してさらに忘れるには、多くの勇気がいるものだ。リルケもまた、「マルテの手記」で詩についてそのことを力説した。ところでヴォルタースのゲオルゲ論は、大変努力した書物でありながら、この点で明らかな失敗だった。ここから読む人が統一したゲオルゲ像を得ることはむづかしい。いろいろな意見が並んでごたごたしている。そのみでなく、グンドルフのような大切な人が軽く扱われ、ハイデルベルクのゲオルゲクライスが殆んどとりあげられていない。こうして資料の客観性に欠けているところもある。これに反して、グンドルフのゲオルゲ論（1921）では、伝記的事項が全くなくて、すべて精神史となって、個人の英雄的な魂の歴史しか出ない。過ぎ去るものと止まるものがこのようなふりにかけられて、素材による重圧が殆んどみられない、いやクライスの人の名すらあがってこない。一切は作品から、詩行から、息のように吸いとられようとしている。グンドルフとヴォルタースは、ゲオルゲ・クライスの二本の柱でありながら、こんなに対照的な人間であった。前者は力の不足と疲労感に脅かされ、後者は力の過剰と無制約に悩まされた。前者にはシュレーゲルとハイネが、後者にはアルントが流れていた。前者には優雅な動きと思考の天才的なひらめきが、後者には支配者の力と栄光があった。しかしヴォルタースには、残念ながら、バンベルク騎士のもつ美しい調和が欠けていた。グンドルフの書簡を読むと、(Stefan George-Friedrich Gundolf, Briefwechsel),ヴォルタースのゲオルゲ論への厳しい批判がよくあらわれている。グンドルフの気にさわったのは、信仰のジェスイットのな光り、プロパガンダの性格であり、最高の教養と政治的・民族的愚行の混合であり、偽造・美化・神秘化・熱狂であり、何よりもこの宣伝管でマイスターが不純に伝わることへの不快であった。(1929. ヴォルフスケールあて)。同じくユーリウス・ラントマンにあてて、グンドルフは自分がヴォルタースの仲間だとみられる宿命を訴え、その Schranken-und Pfaffentum（おべっか風と僧侶風）を強く批判、ヴォルタースの著を独断的著述と断じている(1930)。こうしてみると、コメレルのゲオルゲ・クライス批判は、グンドルフとにたところに立っており、客観性をもつと思われる。二人とも、ヴォルタースと自分を同一視されないように、という意志を表明しているのである。ゲオルゲ即ちヴォルタースとみられるほどの時代であっただけに、この伝記は、ゲオルゲを歪めるのに役立ったといえそうである。しかしゲオルゲからすれば、クライスの学者は一般に、

自分の足の下の広さの堅固な地面から新しい国と国民をつくるという原則に反していた。この単純な足の下だけの地面が二人とも欠けている。ヴォルタースは余りに広い素材をくりひろげて処理できなかったし、またその地面を怒意で処理してしまった。グンドルフもまた、精神的な素材を自分の肉にしてはぐくむ力に欠け、潑刺とした未来の基礎をなくした。だからゲオルゲは、ヴァレンチンとの対話でグンドルフについてこういった：「われわれは、愛する神がどこで弦にふれるか、よく耳をそばだてて聞かなくては。」グンドルフはよく聞くことを忘れたということであろう。ヴォルタースについてもゲオルゲは、ヴァレンチンとの対話で素材の集成本（Sammlarbeit）という強い言葉を出し、人を考え、形成させない欠陥を批判している。

もう一人のクライスの中心であったヴォルフスケールは、その無方向的な活動の流れを厳しく批判され、ゲオルゲはヴァレンチンの対話で、「彼は退屈だから慰めを求めて動くが、自分の地面はみのり少い」という意味のことを面白くのべている。しかしヴォルフスケールは三人の中で、何といってもみのり多い晩年を送り、その業績は戦後も高く評価されている。ヴォルフスケールのみが、ヒットラーの時代に入っても命があった。ユダヤ系であった彼は、晩年にヒットラー登場の不安に耐えられず、自ら亡命、スイスへ、さらにイタリアにのがれた。彼はゲオルゲに従って亡命したのであった。そしてその年マイスターが死んだ時ローマで追悼会を開いて、ホーマーのような盲者の視線で壇上から、感動的にゲオルゲのことを語ったが、そののちは尊敬するゲオルゲのいないヨーロッパにいたくなくなり、ニュージーランドにまで亡命するのである。1933年の事件からかぞえて、1000年も先祖が住んだ土地からひきはなされて15年、うち10年のニュージーランドの生活は、彼の心に甚だしい苦しみを与え、1948年70才で没するまで、すべてを失った生活を続けた。「何がまだ、われらをこの世の光に止めるのか」と彼は歌った。彼は長い叙事風の詩「ドイツ人に寄す」でドイツの運命を歌い、さらに「亡命地からの歌」という詩集で、地中海などをテーマに、ヒットラー帝国批判を歌い続け、さらに「ヨブ、または四つの鏡」でイスラエルの魂を追究して、はてるところをしらない詩魂の発展を示した偉大な詩人は、時代と生の舞台から退きつつも、永遠な、生と死の中間層、人間の無常、言葉の彼方にのみ立たず、さらに現実のみちめさや人類の運命や救いを歌うことを忘れなかった。しかしながら、ヴォルフスケールのこの不幸中の幸いも、いよいよ内面化して、現実には力を及ばせないという一つの危機の表現である。現実の危機に面して、窒息し、息ができなくなるようなところで、陶酔的である、といわれそうなヴォルフスケールは、やはりあのルカーチの、内面の光は最も弱き光である、というテーゼにあてはまるであろう。

もう一人、地味な隠れた詩人のことにふれておく。不思議にもゲオルゲクライスには、ユダヤ

人が多いがそのほかに、なかでもカトリックが多い。しかし彼らの中で最もカトリック的な者はルードヴィヒ・デルレート (Ludwig Derleth 1870—1948) であった。若い時から彼は教会改革を夢みていて、それを行動で実現しようと考えていた。教会のため彼の情熱はもえていた。彼は「委託 (Proklamationen)」という宣言で、キリストの支配権樹立を命令、それとヴァチカンをも容赦せぬ社会革命とを結合した。これには一種の教会ファシズムのようなところがみられたので、深く反省したデルレートは、詩の作風にひっこもって、ミュンヘン、ウィーン、テッシーンに隠れて住んだ。ゲオルゲの「第七輪」が出た時、「新しい神がいらないではないか」と彼は叫んだ。しかし彼はずっとクライスに属し、ゲオルゲの忠実な友人であった。1932年にデルレートはとうとう彼の全詩集をまとめ、「フランケンのコーラン」 (Der Fränkische Koran) と題して出版した。この詩集は殆んど注目されていないが、非常に美しい詩にとんでいる。この作品は九部にわかれ、カトリックの色彩濃いフランケンをたたえ、その風景と彼の予言や哲学がおりこまれている。そしてリーメンスシュナイダーを始め、かずかずの芸術がそこに扱われる。城、庭、バンベルクのドーム、ぶどう畑などが美しく歌われている。キリスト教のみならず、ディオニソスもあらわれ、トマス・アクィン、ダンテ、ゲーテ、ジャン・パウル、ヘルダーリン、ゲオルゲ、ニーチェのひびきがところどころあらわれる。その後彼は詩集を一回出したが、1948年 San Pietro di Stabio で死んだ。

4

コメレルが去ってから、ヴィクトル・フランク (Victor Frank 1909—1943) がゲオルゲのもとにとどまり、ゲオルゲの死ぬ日までつき従った。1931年にゲオルゲはスイスのモリノにいて、そこで最後の三冬をすごすことになる。モリノはロカルノ近郊の小村である。この年彼はその地の別荘をコティルデ・シュライヤーからゆずりうけ、そのアトリエに人々は集った。18才でそこを訪ねたミハエル・シュテットラー (Michael Stettler) が、当時の印象をしるしているように (Begegnungen mit dem Meister 1943) ゲオルゲは若い友が訪れると、質問し、うなづき、早い視線を投げ、生き生きした言葉で語った。その高貴な姿、張りつめた空気はどんな筆も及ばなかった。旅程を考えずにきた彼に、詩人はこっそり金を与えた。このモリノは湖に面し、寝室にバルコンがあり、そのてすりにもたれ、詩人は帰郷する友をいつも見送った。家には三つの出口があり、好ましくない訪問をどの道からでも避けることができた。老詩人は、外界の好奇の目からのがれるところを求め、遂にこのモリノを見出したのである。有名になるにつれて、彼は個人的存在の保護につとめなければならなかった。彼はいよいよ秘密を愛し、長く一定

の住所をもたず、たれにも住所を知らさず、人に住所が知れぬように停車場で投函するようになっていた。クライスの秘密主義とか、名声保護行為とかいう人があるが、実際クライスのたれ一人、詩人の住所を知らなかった。自分を保護するためか、療養のためか、亡命の予感か、自然への愛か、死の予感か、われわれには詩人が一番近い外国に身を秘めた理由がわからない。ウェレンチンとの対話は、スイスへいく少し前まで続いている。そこでゲオルゲは、現実からの逃避や自己疎外を最もしばしば責めている。それだのになぜスイスにのこられるのだろうか。最後の対話は1931年9月14日のもので「ドイツの政治・経済状況からみて、フランスがドイツをまた占領するかも知れない。フランス人はライン問題の行方をいつまでも忘れていない。もちろんドイツのものであるこの土地を持っていくわけにいかないが、しかしここに住めないような日が、きっとくるにちがいない」と閉じている。もうドイツに住めなくなる日がくる、とゲオルゲは予言している。その原因は彼がしばしばふれている絶望的なドイツの政治状況と、それと外国との関係によることだけは明らかである。詩人はよく、モリノからミヌジオの(Minusio) 方へ散歩した。糸杉としゅろに視野を限られ、ぶどうといちごがしげり、湖と、雪におおわれた対岸の高山がみわたせた。散歩がすむと詩人は一口酒をのみ、若い人と話した。フランクとカヨ (Karl Joseph Partsch 1914年フライブルク生れ) と三人でうつした写真は、そのころの生活をしのばせる。老年の愛の清らかさが、くぼんだ深い目からにじみでている。そうかと思えば、疲れた姿勢で書物机に向い、最後を予感させるような写真もある。

1933年、ナチはもうドイツ文学と芸術を占領していた。ゲオルゲのたびたびの予感があたった。それでもドイツ人はまだ文化国への希望をつないでいたが、すぐれた人は多く亡命の途につき始めていたのである。その年の7月、ドイツの各地の新聞は一斉にゲオルゲの写真をかかげた。これは一ビンゲン市民が隠れて他の家の二階から写したものである。詩人は左手にマントをさげ、ビンゲンのふるさとの家をあとにせんとしている。フランクが車のそばで待っている。詩人は元気そうな足どりではほろみを浮べている。それが表情豊かで印象的である。愛情こめて家をあとにする気持が、暗くなく、軽快に出ている。だがこの不正の写真が各地の新聞にのせられた時、ヒットラーはゲオルゲを味方にしようとしたくらんでいたものであった。7月12日ゲッベルス宣伝相の指示で、ゲオルゲの誕生日がいとも壮重に祝われようとしていた。かつ脅迫的な表彰や、シュテファン・ゲオルゲ賞の設立がもくろまれていた。ナチの教育界では、ゲオルゲが新しい時代の先駆者とされることになりつつあった。ブルジョア的な精神は誘惑されやすい。しかしこの詩人には、そんなかけらもなかったし、また彼は、時代と歴史をはっきり見抜くことができた。ナチのこの挙をかわすため、ゲオルゲはベルリンに走り、モルヴィツとベルンハルト・フォ

ン・ボートマーに最後のリートを贈り、それからボーデン湖へと急行した。船が湖の中央にさしかかったころ、彼は「やっと自由に息がつける」(Ich atme freier.) といった。8月にゲオルゲはモリノに帰宅している。この意味でモリノ行きは賢明な詩人の計画的亡命のように思われる。すでにベーリンガーもヴォルフスケールも、もう亡命しているのである。ヨーロッパの中央のドイツ民族が、ドイツ、オーストリー、スイスと、三つの国から手をさしのべるボーデン湖は、それ以後何人も詩人がのがれていく通路となった。ゲオルゲの体は50才ごろから衰えをみせ、1915年尿毒素で重病にかかり、1918年再発、長い入院ののち、1920年三回目入院、そののちもずっとすぐれず、1933年にひどくなって、10月から病床につき、なおかつ、散文集「その日そのこと」(Tage und Taten)の校正につとめ、関節を押し、眠らぬよう努力しては仕事にはげんだ。11月、弱り切った体が一度好転したが、再び悪化、27日にたおれて、意識不明のままロカルノの病院にいき、ベルリンから医師を招いた。意識ははっきりしていたが、脈、血圧ともに低下し、嚥下困難であった。不眠が続くので看護婦が心配すると、ゲオルゲは「かまいません。何度もほかの人のために眠らないことがありましたから」(Das macht nicht, ich habe auch manche nacht für die andern genachtet.) といった。ごろごろ鳴るような声が続き、いよいよ病状が悪化したので、ベットによりそってみると、Ihr Kinder, saget kein Wort! Genug! といい、両手をあげて、友の近づくのを斥けるかのようであった。息は次第に遠ざかり、1933年12月4日、1時15分に心臓が止った。ベーリンガーとフランクは、12月1日に友人に電報をうっていた。周囲の一切と距離をとって横わる詩人。デスマスクがとられた。それは力と落ちつきと深さをたたえている。気高い姿は柩の中でも消えなかった。柩はミヌジオの墓地に、ゲオルゲの遺言に従ってはこばれた。ここでこそ平静に、威厳をもって休めると、詩人は予感していたのであった。決してドイツにおいてではないと、詩人は決意していた。ここにまたわれわれは、明かな亡命の意志をよみとりうるのである。頭には月桂樹冠、左右には月桂樹、前には花。生きている時よりもより賢明に、崇高に、不滅にみえた。内側で笑っているかのようで、死にあらゆるものが浄化され、たわむれにいったいつかの言葉を思いおこさせた(とベーリンガーは伝える): 「では、全く美しくなるために、死ななくてはならないのだ。」埋葬は6日の午後ときめられていたが、早朝に極秘のうちに行われた。朝3時に、ひつぎは閉ぢられ、花で埋められ、友人一同そろろうちに会堂はかたくとぎされ、二、三の者が「第七輪」の詩を読んだ。最も若い者が月桂冠を、他の一人が月桂樹の枝を、6人がひつぎをはこんだ。納められると、めいめいが枝を投げ、花環や花や月桂樹の枝でいっぱい飾られた。それから三人が「約束の星」の最後の合唱を読んだ。のちのヒットラー暗殺計画者クラウス・フォン・シュタウフェンベルク

もその一人だった：

神の道はわれらに清められ
神の国はわれらに定められ
神のいくさはわれらに始まり
神の花輪はわれらに知られた。
神の魂はわれらの心に
神の力はわれらの胸に
神の怒りはわれらの額に
神の情熱はわれらの口に。
神の紐はわれらを結び
神の光はわれらを燃やし
神の救いはわれらに流れ
神の幸いはわれらに咲いた。

ところで、この葬儀の異常さの背後には、当時の政治がつながっていたことが、誰にでも感じられよう。ヒットラーが政権をとり、ドイツが兵營となり、粗野な観念が国民を、歴史と文化から遠ざけてしまっていた。ゲッベルスは今度こそ好機を逸しないつもりだった。ゲッベルスは輝かしい国葬をもくろんだ。スイスの境界からビンゲンまで、この長い距離にえんえんとヒットラーユーゲントのたいまつ行列の人垣をつくり、ひつぎを送ろうとしていたのである。そこへ、詩人がスイスに埋葬されることを遺言できめていたという知らせがきて一切が水泡に帰してしまった。それでナチの高官は、ハーケンクロイツつきの花輪の飾りをたずさえてやってくることになった。ところが予定より半日早く、しかも午前三時に、人も入れずに、僧侶一人なしに、式がすんでしまっていた（Rudolf K. Goldschmit-Jentner）。後日ナチの人たちは、淋しい詩人の墓地に、生まれた日も死んだ日もなく、大きなラテン字体で、ラテン語の次のような墓碑銘があるのを読むことができたであろう：

人よ 記憶せよ 人間は塵であり

塵に帰るもの

たしかにそうだ、と思わぬものがあろうか。しかし悪人たちの塵からは、どれだけ多くの憎しみがたちのぼり、すぐれた人の塵からはどれだけ永遠の光がたちのぼるかに、彼らはきづかなかっ

たであろう。ドイツアカデミー総裁ハンス・ヨーストは、ドイツ文芸アカデミー追悼式を開くことにし、ゴットフリート・ベンに追悼演説するように依頼したが、外的事情のために講演も式も中止になった、とベンの論文を収めた全集の註は伝えている。これはナチが、どんなに気嫌を損じたかのしるしと読めそうである。ゲッベルスはハイデルベルク大学でグンドルフのもとにきて、講義をきいたが、目的はゲオルゲクライスに入ることにあった。グンドルフはそれを斥けた。ゲッベルスはローマン派を研究し、フォン・ヴァルトベルク教授のもとで博士になった。しかもゲッベルスは、そのテーマをのちにもっと都合のいい堂々としたものに変更させたりしているのである。のちにナチが、ゲオルゲをユダヤ主義文学だといいたしたが、ゲッベルスの心理を考えるとのもっともなことである。しかしナチは、できるだけまだゲオルゲを利用しようと試みしてみる (Kurt Ries : Josef Goebbels 1949)。

5

人々はゲオルゲに、ユダヤ人の仲間が多すぎる、と非難した。するとゲオルゲはいつも答えた：「私がつきあっているようなユダヤ人なら、ほかに10人ほどいてもよい。」(グンドルフ・ゲオルゲ往復書簡集1926年)。すでに1930年にゲオルゲはヴォルフスケールにいった：「私はもう私の Stab (死刑宣言の権杖) をずっと以前に折って、深く地下に埋め、誰も見えないようにした。」なぜゲオルゲは地下深く判決の言葉を隠したのであろうか。これは一般には理解されがたいことだが、若い時からの芸術観からすれば、真実は常に存在自体であり、人により手をかえて政治化されるものではなかった。それにナチに対して芸術を政治化するにしては、もう彼はおそすぎていた。彼の言葉には、常にそのことに起因する深い絶望感がある。このころゲオルゲは友人にいった：「私が今見抜いていることを、すべてあなた方にいえません。しかし今にあなた方は一切を体験し、とっぷりわかることでしょう。そしてさらに荒れすさんだ時代になるでしょう。しかしそうならざるをえないのですよ。あなた方はそのわけがわからないでしょうが。」これはもうゲオルゲが最終的にあきらめ切ったしるしのようなものである。ナチと社会主義の争う時代に、人々にはどちらかにいくことが必要なようにみえた。そのままじっとしていても、よくはなかった。しかもゲオルゲのユートピアは、どこにも場を見出せなかったのである。きっぱりした時代への拒絶は、時にゲオルゲの言葉からもれたが、きっぱりした斗争は老詩人からきこえてこなかった。ゲオルゲがこんなにナチを見抜いていたことはゲオルゲの偉大さであったが、ナチに対する対抗手段がなかったことがそのユートピア的な芸術論の限界であった。

永遠に1933年にドイツを去ってしまった詩人は、フランクフルト市から第一回目のゲーテ賞賞

金をもらったが、自分の目的に使わず、若い学者の初版印刷費に全部提供した。詩人は感謝一ついかなかった。ゲッベルスなどナチの人はゲオルゲをプロシヤの文学アカデミーに帰属させようとあせったが、丁重に、しかもきっぱりとゲオルゲは断った。それにもかかわらず、また、スイスに亡命した事実がナチにわかったにもかかわらず、ナチはゲオルゲを第三帝国の予言者として祝福した。パリでは、ゲオルゲがただ若干の人のために静かに仕事した詩人であり、ナチなどに目もくれなかったことが強調された。それでもナチは詩人の詩を読まずに、ただゲオルゲをナチの先駆者と呼び続けた。そしてシュテファン・ゲオルゲ賞が設けられ、ゲオルゲの詩のはしきれにも及ばぬシーラッハやオイリングガーなどなどに1000マルクを与えた。外国新聞はこれに抗議したが報道されず、ドイツでは二、三の孤独な反対の声がきかれるだけであった。グスターフ・ハルツングはこう書いた：「私は抗議する。死が近づくやドイツをすてて、第三帝国の土の下に埋められることを欲しなかったシュテファン・ゲオルゲの名が、永遠の国にと茂っていく詩人の名が、乱用され、ドイツ国民に対して1933年の受難を、彼の本質的肯定としておしつけている事実、私は抗議する。彼らの人間の粗野、言葉の卑しさ、思想の低劣さは、ゲオルゲがドイツの生命の内容とみなしたあらゆる価値に対する最も大きな侮辱なのだ。」このような事件が重なって、漸くナチには詩人の晩年の魂固な沈黙と拒否の本質がすっかりわかった。それからナチの反ゲオルゲ的な行動が始まるのである。もちろん1933年にヒットラー側にいたクライスの人もいた。ヴォルデマール・ウクスクル、ルードヴィヒ・トールメーレン、クルト・ヒルデブラント、アルブレヒト・ブルーメンタールはナチを肯定していたし、またエルンスト・ベルトラムは、ボン大学で新しい国家の名のもとにゲオルゲを未来の詩人と賛えた。ヴォルタース、グンドルフ、ヴァレンチンは死亡していた。その他ヴォルフスケール、ペーリングガーなどかなり多くは亡命していたのである。

さきにのべたモルヴィツのゲオルゲ注釈が出ると、ナチは完全にゲオルゲ宣伝の手を引いた。ゲオルゲについての講演は好ましくないということになり、さらに彼について書くと身分が危いという様子であった。愚劣なナチのある新聞はゲオルゲがユダヤ主義者だと書きたてた。1939年に血と土の文学者、フランク・コッホはこう書いている：「永遠の星の如く光るわれわれの国民生活の模範にゲオルゲは属していない。」しかしナチのプロパガンダのためにゲオルゲの評価が外国で落ちることとなった。ゲオルゲのヒューマニズム的な力強さは帝国主義的な夢の姿とされ、人間理想の教育でなく軍隊教育をする詩人だ、という人々さえ出てきた。支配欲の強い、氷のように冷い詩人という新聞もあった。一般にしかしゲオルゲの詩集は、深い沈黙に包まれた空襲のさなかに、人々が持ってさ迷う書物であり、レジスタンスする人々の味方であった。ファシス

トはゲオルゲなど読まなかったのである。かつてゲオルゲから多くをえて、ユダヤ人をしめだせと主張して容れられず、わかれていったシュューラーとクラークスは、第三帝国のために働いて、ゲオルゲをけなすのにつとめた。ヒットラーを教え、ナチのマーク鉄十字をひろめ、ヒットラーの訪問をうけつけていたシュューラー、このドイツを殺したというべきシュューラーの著述の序文に、クラークスは次のような文章を書いているのである：「ゲオルゲは純粋なアーリア人だろうか。みんなはそうだといっている。祖父はカトリック信奉者でフランスから移住したというが、そのさきはわからない。だがそのとおりだと一応仮定しておこう。それでも特にむつかしい次の三点に直面するのだ。第一にゲオルゲが文学政治的に達した強力な地位はユダヤ人によってえられたものだ、といえる。彼の本を出版したボンディ書店はユダヤ人の店だ。売らないということにして芸術草紙が出ていた書店はすべてユダヤ人の手にあったのである。初期にはユダヤ人の画家、トーマス・テオドル・ハイネが表紙を描いた。またデソワール、ジンメル、カントロヴィチなどなど無数のユダヤ人の教授達がゲオルゲに従っていた。ゲオルゲはいつもユダヤ人か半ユダヤ人に肖像をかせ、詩人を求める町々の下宿にはいつもユダヤ人の家があてられた。60才の彼の誕生日にドイツ以外の新聞で彼のことを書き立てたのは、みんなユダヤ人だった。そしてドイツの国境の彼方でユダヤのインテリが、余りに早くしばんだ彼の詩をほめようと今日でもなお苦心しているのである。」有名な学者クラークスが、こんな根も葉もないプロパガンダをやったのである。

シュタウフェンベルクは、クラークスやシュューラーなどの愚劣な魂に反対する一つの具体的な証明として、ヒットラーの暗殺を試みた。この有名な事件については、架橋第三号（1958）に牧祥三氏のすぐれた紹介「ゲオルゲの最後の弟子」が出ている。クラウス・フォン・シュタウフェンベルク伯（Claus von Stauffenberg 1907—1944）は、兄アレクサンダー（Alexander von Stauffenberg 1905—～）、ベルトールト（Bertold von Stauffenberg 1905—1944）とともに、シュツットガルト出身の三人兄弟である。彼らは古典学の権威、アルブレヒト・フォン・ブルーメンタール（Albrecht von Blumenthal 1889—1945）の世話でゲオルゲのもとにきた。ペーリンガーは書いている——「ドイツをそののろいから解放するため、他の誰よりもさきがけて命を投げだしたこの人が、ゲオルゲの教えをうけたこと、彼において言葉が行為となったこと、彼が、もえるようにドイツの恥辱を感じている兄弟と友とドイツ国民を信頼し、恥知らずが全欧にもたらした不幸を終らせようと試みたことは、ゲオルゲの考えと信念がいかなるものであったかをしのばせる。」1944年7月20日、ヒットラーの暗殺をはかってラステンブルクの本党会議室の机の下に隠された時限爆弾が、定められた時間通り爆発したが、予期に反し、総統は

微傷しかうけなかった。好機をしばしば逸して焦るうちに、犯人のクラウスは、またもや失敗した。有能なクラウス・フォン・シュタウヘンベルク大佐は、一斉峰起の指揮をとり、すべての将来を計画していた。国防省をおさえ、全ドイツに動員を命ずるワルキューレ計画がこれであった。カロッサは彼のことをこうしている：「人生からの疎隔、世間に身をそむけていること、説教師的態度を、人々はゲオルゲに対して非難した。しかし教え子の中から、ドイツを悪い精神から解放しようとし、失敗した試みを生命をもって支払った行動者がでた。彼はすでに少年のときからゲオルゲの精神を吹き込まれていて、焔のまわりを歩いているうちに自分も焔と化した行動者の勇気をもっていたが、暗殺者の巧みさとはもっていなかった。（若林光夫訳）」クラウスはゲオルゲの詩を立派に体験した將軍であり、詩を書きしなかったが、ゲオルゲの詩から「すべての人のために測ること」をいつも考えていた。彼はゲオルゲの詩集「新しい国」をよく引用、暗殺計画のころはとりわけ合言葉のように、「第七輪」の中の「反キリスト者」をつぶやいていた：

「見よイエス山より現れ 森にあり
われらは明らかに見た 水を酒に変え
死者と話す彼を見た」と君らはいう。

「今わが時となる わなに獲物は余り
魚は網に流れあふれる」と君らをまねて
おお夜に私が笑う声を聞かぬか。

賢者も愚者も国民は狂いころび
木を抜いて殻物を踏み物にし
復活者の行列の道をつくる。

わが仕事で天のものでないものはない
ただそれとは毛一本の差しかないのに
感覚を錯乱させて偽瞞にきづかない。

私は重い、稀なものの代りに軽いものを
粘土で削る、それは金のように
また靄や液や香料のようだ。

それは偉大な予言者が信じないこと――

壟し 播き 建てることの無い術や

ただ吸おうと力を貯えること。

やくざ者たちの王は 国を拵げ

宝は余り 幸いはおしよせる…

ついには叛逆の徒の屑も亡べ。

魔の仮象に魅せられて 徹呼し

昔の蜜の残滓を使い果たし

漸く終りの日をひかえて危しむ。

やがて乾いた桶に舌をやり

燃える庭を迷う牛ににる、

こうして裁きのラッパが轟くだろう。

こうしてゲオルゲの40年前の詩がナチの国民と指導者のアナロジーとしての、まぼろしの奇蹟の人キリストとそれにまどわされてむさぼる人々という政治的対象を内包することがわかってくる。さて、シュタウヘンベルク三人兄弟のうち、最年長のベルトルトも、この仕事に加わり、気高い落ちつきを失わず、死の道を進んだ。民法学者であったこのナチの犠牲者をゲオルゲは詩人の副相続人に定めていたが、相続人ヴィクトール・フランクが1943年モスコー近辺で戦死したため、それ以後、ベルトルトが相続人、弟クラウスが副相続人であった。だが二人ともこうしてナチに裁かれ、しかも詩人のあとつぎとして恥ぢぬ試みに生きた。彼らこそ、青春が過程でなくて完成である、というマイスターの思想を身をもって実現したのである。しかしその失敗は、エリート的なゲオルゲの一面の中に、すでに悲劇性として早くからあらわれていなかったであろうか。ゲオルゲは民衆は素材であり、手段であると歌った。シュタウヘンベルクの計画においても、民衆は手段となって、自然と反乱に赴くようになっていた。シュタウヘンベルクの革命は、民衆なき革命だったといわれたりする。三人兄弟のうち、アレキサンダーはこの難をのがれ、収容所から収容所に転送された。そのあいだにも詩人の才を失わず、また詩人と友人たちのため、墓碑を建てたのである。ゲオルゲの内面的な魂は、深ければ深いだけ外に働きかける。処刑され

たベルトルトに捧げたゲオルゲの詩は、ベルトルトやクラウスの魂に、今あるヒットラーの国の
現実には否という行動の魂を吹き込み、疎外されない真実の現実を奪回するようにしたのである：

B. v. ST. (ベルトルト・フォン・シュタウヘンベルクに)

神々の町の ふりそそぐ夏の日射しに
われらはしばしば死んだ王子の
あとを尋ねたものだ。

気高かさが死に絶えたら
血に飢えた軍国の さかんな武器も
戦争の利益 鋭い頭 力も何になろう。

新鮮な豊かな人の広間もむなしい、
その庭は 太古の大木が切られると
その祝福をやどしはしない。

敬虔な妄想以上であっても
万人平等 その巾広い幸福が役に立とうか
もし優雅さが死にたえたなら。